

【研究ノート】

グレンとハウベンスの「ツーリズムと人新世」について

片瀬 葉香

要約

近年、ツーリズムが気候変動の影響を受けている一方で、ツーリズムが地球環境に負の影響を与えているという議論が進展している。気候変動とツーリズム、ツーリズムの持続可能性などに関する認識を深め、緊急に取り組むべき課題を明らかにすることが求められている。本稿では、人新世（Anthropocene）、すなわち、「人類の時代」という観点からツーリズムを捉える試みに着手した、グレン（M. Gren）とハウベンス（E. H. Huijbens）の論究を軸として、人新世におけるツーリズムとは何か、ツーリズムは地球システムにいかに関わるべきか、という問いの糸口をつかみたい。

Keyword : ツーリズム, 人新世, アントロポス, 地球システム, 倫理

1. はじめに

近年、ツーリズムが気候変動の影響を受けている一方で、ツーリズムが地球環境に負の影響を与えているという議論が進展している。気候変動とツーリズム、ツーリズムの持続可能性などに関する認識を深め、緊急に取り組むべき課題を明らかにすることが求められている¹。

グレン（M. Gren）とハウベンス（E. H. Huijbens）（以下、G&Hとする）は2014年に、論文「ツーリズムと人新世（Tourism and the Anthropocene）」を著し、「人類の時代」である人新世（Anthropocene）という概念を初めて導入して、ツーリズムの科学的、政治的、倫理的な課題を調査し、概観している。その中で、「ツーリズムは間違いなく人新世を特徴づけるジオフォース（地球物理的な力）（geophysical force）である」との見解を示した。すなわち、ツーリズムは「地球システム（Earth system）」に負荷を与える存在であり、地球規模での持続可能性という人新世の環境問題を構成する基本的な部分として捉えられなくてはならないと述べている（G&H, 2014, p. 13）。

さらに、G&Hは編著者となり2016年に、『ツーリズムと人新世（Tourism and the Anthropocene）』を刊行している²。この本の扉には、「人新世がツーリズム（観光）にもたらす可能性のある問題と課題を探究し、ツーリズム研究における概念的および経験的な企てをどのように再構成するかについて洞察を深めたい。さらに、人新世というレンズを通して、持続可能な開発

¹ 片瀬（2020）。

² 2016年の刊行時、グレン（Martin Gren）（Ph.D. [人文地理学]）は、スウェーデンのリンネ大学（Linnaeus University）のツーリズム研究（Tourism Studies）の准教授である。ハウベンス（Edward H. Huijbens）は、アイスランドツーリズム研究センター（the Icelandic Tourism Research Centre）の地理学者・研究者、アークレイリ大学（Akureyri University）の教授であり、主にツーリズム理論、イノベーション、景観認知、マーケティング戦略、ウェルビーイングなどの研究を行っている。

(sustainable development), 地球の限界 (planetary boundary), 倫理 (特に, ジオ倫理 [geo-ethics]) との関連においてツーリズムの役割について思索を深め, その地球との絡み合いを理解するためにツーリズム理論に再び焦点を当て, 自然と社会の二元論を超えてツーリズムについて考察したい」と記されている。「過去数年間に人新世という概念への関心は, 自然科学, 社会科学, 人文科学にわたって非常に高まっているが, ツーリズム研究における本テーマへの取り組みの歴史は短く限定されている」(Huijbens & Gren [以下, H&G], 2016, p.1) という指摘を鑑みれば, 人新世として表現されるものとの対話にツーリズムという領域を導入した点において一特に, 観光学, 地理学, 人類学, 社会学といった諸分野にまたがる学術分野に関わる幅広い読者にとって『ツーリズムと人新世』刊行の意義があるのではないかと思われる。そこで本稿では, ツーリズムと人新世に関するG&Hの論究を軸として, 人新世におけるツーリズムとは何か, ツーリズムは地球システムにいかに関わるべきか, という問いの糸口をつかみたい。

2. 「ツーリズム理論と地球」(2012年)の考察

2014年論文「ツーリズムと人新世 (Tourism and the Anthropocene)」の考察に入る前に, 「ツーリズム理論と地球 (Tourism theory and the Earth)」という2012年に発表された論文に触れておきたい。この論文は表題が示すように, 従来からのツーリズム理論を検討したものであるが, その中で, 人新世の概念を取り入れた2014年論文の前提となる重要な論点に言及している。そこで最初にこの2012年論文を考察する。

まず, ツーリズムと観光客については, 地域, 風景, 場所, 空間などの概念を通じて研究されてきたが, 最近ではさまざまな地理的スケールにおけるツーリズムの移動性 (モビリティ) への関心が加わったと指摘する。そして観光学者は, 「ツーリズムは本質的に地理的活動」(Lew, 2001, p. 113) であることを認めているようだ³。その上で, 理論と実践におけるツーリズムに関する地理学的見解, 「ツーリズムは地上のビジネス (earthly business) である」(強調は原文通り) を考慮すれば, ツーリズム研究において「地球 (the Earth)」それ自体が, 実際には, 決して明確には理論化されていないのは逆説的なことであるとの見解を示し, 地理学的理論を否定している。そして, 理論的な障壁や可能性を厳密に検討し, ツーリズム理論における「地球」という概念の再認識に貢献することをこの論文の目的としている (G&H, 2012, pp. 155-156)。

G&H (2012) はその上で, この地球に関する試みを社会科学としてのツーリズム研究を問題視することから始めている。まず, ツーリズムに関する理論化の多くが, 社会科学の最も重

³ G&H が文中に引用している資料に関しては, 論文・書籍全体における位置づけや解釈のされ方などに基づいて, 本稿の「参考文献・資料」への記載の有無を判断した。

要な視点に依拠しているとし、ツーリズムとツーリストを「社会的な」現象として捉える。そして、アーリ (J. Urry) などの社会学者の論旨をたどりながら、結局、「現在までのところ、グローバル経済や社会変革のプロセスとしてのツーリズムの発展や内的な力学を説明する理論構築や理論は展開されていない」(Page and Connell, 2006, p. 9) と述べ、ツーリズムは十分に社会的なものとしては理論化されていないと結論付けている (G&H, 2012, pp. 157-159)。

次に、社会的なものと地球との関係について、まず、ツーリズム研究に関するこうした社会的な理論化では、ツーリズムやツーリストは、本来的には、社会的なものという基準面 (the reference plane of the social) の上に描かれるべきだということが示唆される、と指摘する。その上で、地上全体に広まったほぼ標準的なツーリズムの定義、「日常生活圏の外部にある場所へ旅行し、そこに滞在する人びとによる諸活動」は、観光地理学というサブ領域においてでさえ、問題のある定義として捉えられている。というのもこの定義は、社会的な実践のいかなる個別の領域をも含んでいないからである。それでは、「どういうわけで、地理学者は『地球を描くこと (earth writing)』をまさに意味する学術分野の出身であるにもかかわらず、自らの研究を社会的なものとして考案したいという誘惑に抵抗できずに、『地球』を維持することを忘れられないなんてことがあるか」と問いかける。そして、この忘却を説明する上で重要なことは、社会科学と社会理論に関するこの社会的な存在論は、「地球」が、「地域」、「景観」、「場所」といったさまざまな空間的な対象へと概念的に変形することに等しい。さらに、この「脱地球化された社会空間主義 (de-earthified social spatialism)」は、空間には富むが、地球は不在であるような社会科学、ツーリズム理論、驚くべきことに人文地理学においてでさえ当然視されている。そこで、「社会的なものという基準面に抜け穴を設置する必要がある」として、を続けている (G&H, 2012, p. 160)。

「ツーリズムは、事物 (things)、ツーリズム関連の事物で溢れており、ツーリストは、かなりの期間ツーリズム関連の事物からなる世界につながれている」(Franklin, 2003, p. 97)。こう述べるフランクリン (A. Franklin) を引用して、G&H (2012) は、ツーリズム理論および研究において、例えば、飛行機、チケット、レストラン、博物館、道路、飲み物などの「物質的なもの (material things)」を重要視すべきだとする。しかし、事物は無視されるか、概念的に物質的な対象 (例えば、ツーリストがその社会文化的な意味を解釈するために眼差しを投げかけるような、モナ・リザといった観光対象) へと変えられてきたと述べる。その事物は、社会的なものと自然的なものとの境界を越えるようなハイブリッド (hybrid) にもなり得る。そして、ハイブリッドという概念、あるいは、さまざまな成分の混合物を通じて、ツーリズムを社会的なものとして捉えようとする特異なツーリズム理解に抗して、社会的なものに対して物質的なものが有する重要性とともに、非人間および物質的エージェンシーの役割が社会的に中核をな

す構造に位置付けられると指摘する (G&H, 2012, pp. 160-162)。

さらに、G&H (2012) は、ハイブリッドを社会科学に組み込むための最もよく知られたアプローチは、アクターネットワーク理論 (actor-network theory: ANT) であるとし、ANT理論を用いて、ツーリズム理論の展開を検証している。その中で、「さまざまな社会と地域、交通システム、宿泊と設備、資源、環境、技術、人びとと組織の内部において、または、それらをまたいでつながっていられる」(Van der Duim, 2007, p. 967) ように、空間が実演される状況 (enactment of space) に関わっているような「ツーリズムスケープ (tourismscapes)」という概念を取り上げて、以下のように指摘する。この「ツーリズムスケープ」は、さまざまな物質的なエージェンシーに関わっているが、このことは、ツーリズムは、「ツーリズムのアクター・ネットワークキングあるいは秩序性 (ordering) がある特定の形態をとった後でのみ、純粋な社会現象として出現することができる」ことを意味する。そして、本論の目的は、ツーリズム理論において「地球」を理論的に再認識することであるため、ツーリズムスケープを、「地球」との関係に位置付ける必要があるとし、「地球への回帰」に向けて検証を続けている (G&H, 2012, pp. 162-163)。

G&H (2012) は、これまで概説してきたことを受け、「異種物質の秩序性 (ordering of heterogenous materials)」としてツーリズムを理解することによって、「伝統的な社会科学の理論化が、時代遅れではないとしてもかなり問題のあるものとされる」と指摘する。その理由は、「社会的なものを自己言及的に理解することによって、社会的なものとしてすでにまとめられ、浄化されたもののみが地図上に描かれる (マッピングされる) ことになり、そのようなものの生成に関わっていたかもしれない非社会的な要素の発生を除外してしまう」からである。さまざまな現象の混合物やそのつながりが研究対象とされる場合には、社会的なものを一つの独立した社会という基準面の上に描くことによって、「ソシオ-グラフィ (socio-graphy)」が成立する。だがこれは全く無用である。というのも、『社会的な (social)』とは、『社会的なもの (the social)』の解明には役立つかもしれないが、しかし、それだけである。私たちに今必要なことは、その他のあらゆる種類のつながりをも解明するある一つのつながりだ (Latour, 2007, p. 4) からである。そして、「その他の種類のつながりのすべてを解明」するために使用することができるのは、「主たる基準面としての地球である」と結論付けた。さらに、ジオ哲学 (geophilosophy) の理論を展開して、そこで理解されている「地球」は、はかない人間存在が、把握することも表現することもできない無数の動的な物事の動き (matter-movements) から構成されていることを示し、ツーリズム研究における表象 (representation) に関しては、脱/再領土化 (de/re-territorialisation) のプロセスがさらに重要であると述べている (G&H, 2012, pp. 163-165)。

G&H (2012) は、このようにしてツーリズム理論の再建に着手したが、その根拠として、

これまでの地理学的定義には、地域や空間などの概念はあるが地球はないと主張する。そして、社会的なものと自然的なものとの境界を越えるようなハイブリッドにもなり得るツーリズムを解明するには、社会科学の理論には限界があると指摘する。「気候変動」、「環境危機」、「持続可能な開発」、「低炭素社会」、「地球温暖化」といった話題に関する世間一般の認識が高まるにつれて、「地球に棲まうこと (inhabiting the Earth)」に関してさらに多くの問題が表面化している。もし、ツーリズム研究という分野において、「政策主導で産業後援型の仕事が優位を占め、分析を通じて産業主導の優先事項や観点が内面化され」(Franklin and Crang, 2001, p. 5; Shaw and Williams, 2004, p. 275) ていくなれば、私たちは、「地球主導の優先事項や観点」を追究するために、ツーリズム研究という家に小さな窓を開けようと試みたと述べ、本論のまとめとしている (G&H, 2012, pp. 165-167)。

3. 「ツーリズムと人新世」(2014年)の考察

「人新世」という概念は、2000年のクルツツェン (P. J. Crutzen) 他による発表に由来する。G&H (2014) は、当概念について、以下のように説明している。論文「ツーリズムと人新世」が発表された2014年までに、自然科学のみならず、社会科学と人文科学においてもかなりの成果が発表されているが、ツーリズム研究では正式に紹介または調査されたことはない。したがって、人新世の概念を紹介し、ツーリズム学の研究と理論に関して人新世が提起する可能性のある課題を調査し、概説することをこの論文の目的とする。そして、取り組むべき課題として、以下3点を挙げている。

- ・人新世における人類と地球の関係の一部である地球物理学的な力としてのツーリズムの概念化,
- ・地球の限界とガバナンスの文脈において人新世という概念がツーリズムの科学と政治に対して有する含意,
- ・人新世におけるツーリズムの倫理

(G&H, 2014, pp. 1-2)。

G&H (2014) は、「人新世と地球へようこそ!」と題する章で、まず、人新世の発生は一般に1750年に遡るが、人類の地質学的大約および生態学的影響は、第二次世界大戦後に急激に増加したと指摘する。それゆえ、「大加速 (Great Acceleration)」, これは、指数関数的成長のほぼすべての側面 (国際ツーリズムを含む) に示されているが、人間活動の変遷を示す一つの目印として認識されてきたと述べる。そして、人間活動の影響による気候変動と地球温暖化に関連した現実 (例えば、大気中のCO₂レベルの上昇) と問題点に対処するための行動が急務であることを訴え、人類は、不確実性と危険に満ちた未知の領域としての人新世に突入していると強調

する。さらに、地球のダイナミクスを分析し、「人類が安全に活動できる範囲 (safe operating space for humanity)」を定義し、人類が侵入してはならない重要な地球規模のプロセスに不可欠なパラメータを特定する最近の試みでは、9つの地球の限界のうち3つをすでに超えていることなどについて詳細に述べている (G&H, 2014, pp. 2-3)。

さらに、現代の構造は社会と自然の概念的な分離に基づいて設立されたが (Latour, 1993; Latour, 2004), 現代のプロジェクトもまた、地球が実演される状況 (enactment) —その背景には人類の歴史と社会から明確に分離された地質年代が潜んでいる—に依存していたと指摘する。現代の地理学に表象されているように、このことは、「地表のすべての点が均質なアクセスと可用性の仮定を通じて説明できることを示している」が、同時にこれは、現代のツーリズムと「ツーリストのイメージ (tourist and tourism imaginatioings)」 (G&H, 2009, p. 2) を支えてきており、利用可能な自然とアクセス可能な風景は、さまざまなツーリズム体験の対象としてすぐに役立つと述べる。そして、人新世の中心において、この地球が人類を維持することのできる可能性は、環境保全と持続可能性という一般的な概念を通じて対処されることになる自然、風景、そして目的地として、せいぜい脱領土化 (de-territorialized) されているように見えるだけであると論じている。さらに続けて、「操作可能なものとしての地球の技術的枠組み」 (Morton, 2012, p. 16) は、人為起源である地球規模の気候変動に完全に重なり合い組み込まれている、高炭素の経路に依存するツーリズムシステムという地理に一致していると述べる。そして、『大加速』の一部として、科学技術によって触媒された、この化石燃料に駆り立てられたツーリズムによる地球の離れ業 (tour de geo-force) (強調は原文通り) は、国際航空によって象徴され、気候変動と密接に関連している。人新世の理解では、現代のツーリズムは、人間の目的のための地球の再形成と気候変動に関与した地球物理学的な力である」と断定している (G&H, 2014, p. 4)。

次章の「アイスランド—人新世のツーリズム目的地」では、小国のアイスランドを例として、人新世の重要性を検証することを目的としている。まず、2012年のデータに基づいて、アイスランドへの訪問者のほとんどが航空機で訪れていること、これを到着空港別に見ると、首都レイキャビック近郊のケフラヴィーク (Keflavik) 空港到着が全訪問者の85%、他の空港が1.5%を占めていること、また、船舶での到着が13.5%を占めていること、さらに、同国のCO₂と温室効果ガス総排出量の7% (2009年) が国際航空によるものであることを示している。そして人新世では、アイスランド航空 (Icelandair) を、地球物理学的な力の一つとして含める必要があると認めている (G&H, 2014, pp. 5-6)。

続いて、アイスランド航空の環境政策について触れている。同社は、オペレーションを通じて環境に与える影響を最小限に留め、会社が利用できる資源を可能な限り使用することで、持続

可能性を促進する作業を開始するとした。そして、2020年までにカーボンニュートラルな成長を目指し、2050年までに航空輸送からの炭素排出を停止するという国際航空運送協会（International Air Transport Association: IATA）の将来ビジョンを支持した7つの環境方針を掲げた。これに対して、G&H（2014）は、「これらの戦略の多くは、環境問題ではなく、原油価格と密接に関連している燃料効率に言及」しているが、「同社の環境方針は、持続可能性を世界規模で比較すべきものについては何も示していない」と、その目標を批判している。また、2011年から2020年のアイスランドのツーリズム政策は、気候変動や地球規模の持続可能性については言及していないこと、また、目的地やアトラクションへの陸上輸送に関するツーリズムの移動性についても、具体的な目的や政策手段を設定していないと指摘する。そして、地球規模での持続可能性の問題とツーリズム政策との断絶は、それが企業レベルであろうと、公共の領域であろうと、人新世におけるガバナンスの中心的な側面を示しているのではないかと嘆じている。そして最後に、「行動を求めることは簡単であるが、アイスランドのような小さな国の唯一の観光客創出会社の地球物理学的な力にさえ、人新世のグローバル政策を導くという試みは、その成長に直面して、おそらく非常に困難な作業になるだろう」と締めくくる（G&H, 2014, pp. 6-8）。

G&H（2014）は、次に「人新世における政治と科学」の章を設け、人新世における政治的課題の重要性を指摘している。まず、人新世の時代には、人類と地球との関係が前面に押し出されているが、この新しい「人間の条件（human condition）」に関する政治的な難問は、「前例のない概念的および政治的課題」（Pálsson *et al.*, 2012, p. 7）を表しており、政治と科学に対する包括的な関心事となる。しかし、「現代では、地球は本質的に政治的領域の一部として認識されてはおらず、惑星規模での人類のジオフォースの課題に取り組むことができる人類、または政治制度や統治形態はない」と、チャクラバルティ（D. Chakrabarty, 2012）を参照して断言する。そして、人新世で必要とされ、形成された新たな絡み合いは、事実の領域としての科学と、価値の領域としての政治との間にある現代の分業を侵食していることを意味すると述べる。「正当な政治的なものと正当な科学的なものとの間に境界を描く」（Sörlin, 2013, p. 15）ことはますます困難になっており、「政治と科学の両方が、同じテーブルで価値と事実というゲームを演じなければならない」と指摘する。そして、人新世における今後の課題は、「もはや自然と社会との関係を近代化することではなく、地球と人類との関係を生態化する（ecologize）ことである。ここで重要なのは、惑星の境界と限界（地球規模の持続可能性）の科学のおよび政治的側面、および惑星規模での地球物理学的力のガバナンスである」と強調する（G&H, 2014, pp. 8-10）。

この論文の最終章では、「人新世における倫理」と題して、倫理の重要性を論じている。

G&H (2014) は、「倫理は伝統的に人間の主観性を前面に出してきた」が、人新世において、「人類は地球の責任を自ら負わなくてはならない仕事に直面している」と述べる。また人新世の倫理的な核心は、「回復した湿地や絶滅危機種に対して責任を取ることは、地球全体のエコロジーに対して責任を取ることは大きく異なる」(Preston, 2012, p. 198)ということにあると指摘する。さらに、何よりも重要な人新世の倫理的な問いとして、どのように地球の未来により深く献身することを請い求めればいいのか、と投げかける。地球一世界と地球規模で関係するケアの倫理は、依然として欠けており、それはまた、地球という尺度での感情的な献身を必要とするだろう。それは、ある種の「ジオ・フィリア (geo-philía)」であるが、「人間が未だ共同では発達させていないものである」と言う。したがって、「地球と人類に責任をとることは、また、別種の倫理を必要とするかもしれない」と結んでいる (G&H, 2014, pp. 10-11)。

G&H (2014) はなぜ人新世における倫理の重要性を強調したのか。地球工学は、「人間が初めて完全な意図を持って神々の領域に入」(Preston, 2012, p. 189) ったとされる。そのような地球工学を適用することにより、人間は意図的かつ故意に地球との関係を変え、「地球を何か違う巨大な人工物に変え」(Preston, 2012, p. 191) てしまうことを恐れたからではなかろうか。クルツェン (Crutzen, 2002) は、気候を「最適化」するために、国際的に受け入れられている大規模な地球工学プロジェクトが関与する可能性がある」と述べた。2007年にはステフェン (W. Steffen) 他との共著で、地球温暖化を抑制させることを目的として、エアロゾル粒子 (硫酸塩、塵など) を大気へ排出することによって純冷却効果を求める手法といった地球工学的方法を提案した (Steffen *et al.*, 2007, p. 619)。こうした主張に対し、G&H (2014) は、「人新世における人類の未来に対するクルツェンの技術的アプローチは、倫理的側面が回避されることを効果的に意味している。また、倫理が政治に巻き込まれ、イデオロギーから分離するのが難しいことを示している」と批判的見解を述べている (G&H, 2014, p. 11)。

さらに、人新世とツーリズムの政策と実践において、ツーリズムは、地球と人類に対する地球規模での境界と限界との特別な関係において評価される必要があると主張する。まず、「人新世の勢いが続くにつれて、アイスランドのような小さな国においてさえ、ツーリズムを地球物理学的な力として捉え、その規模と複雑さを管理できる単一の機関、政治的統治のレベル、またはツーリズム部局はない」と述べ、小規模なツーリズムの目的地や名所を運営することさえ難しいと指摘する。その上で、人新世の仕事が、「惑星全体およびその人類との地球物理学的な関係のすべて」を支配する方法を見つけることならば、その時を思い描いてみようではないかと想像力をかき立てる。だが、人類と地球の地球倫理的空間は未知で危険な領域であり、どちらもこれまでにはなかった。ツーリズム学者や研究者にとって、「もし惑星を消費し、改変することによって自らの消滅を加速させた優占種があったなら」、そして、「ツーリズムのイ

デオロギーがたまたま加速機関の一つだったとしたら」、重要な倫理は何であろうか。「ツーリズムは地理的な力というよりは、地球物理学的なものである」と改めて強調している (G&H, 2014, p. 12)。

本論の結論では、以上述べてきたことをまとめ、最後に、「人新世におけるツーリズムは、引き続き、メタ政策問題であり続ける可能性が非常に高い」と指摘する。これは、「ビジネスの多様な特徴のためだけでも、デスティネーションが目的地のレベルで社会的、経済的、環境的に持続可能になるための緊急を要する機会として捉えられているという理由だけでもない。それは、ツーリズムが惑星規模でのジオフォースの一部だからでもある。いったん地球上のツーリストが後からきた地球人として姿を現わすと、最終的には、退屈な普段の日常生活からどうにか逃避するだけではないことに気づくかもしれない。旅行行動、炭素排出、地球資源の消費を通じて、ツーリストは脆弱になっただけでなく、ますます、自身と地球との物事—エネルギー変換網に依存するようにもなった。とはいうものの、ツーリストは自らの形態上の選択にこれをまだ組み込んでいないが」と述べる。そして、「人新世におけるツーリズム研究の今後の課題は、困難であると同時に緊急を要するものであり、無視すべきではない」と締めくくっている (G&H, 2014, pp. 12-14)。

4. 『ツーリズムと人新世』(2016年)の考察

この書籍は、編著者であるグレンとハウベンス (G&H) の他、北欧、オランダ、スイス、ニュージーランドなどで、観光学をはじめとして、地理学、環境学、民俗学、哲学などを専門とする全19名の寄稿者によって編纂され、2016年に刊行された。ツーリズム研究に関して人新世が提起する問題や課題を検討し、今後、探究すべき概念的、経験的な企てを再構成する方法を明らかにすることを目的とする。

本書は、全11章から構成されている。第1章「ツーリズムと人新世—差し迫った出会いに向き合う (Tourism and the Anthropocene: An urgent emerging encounter)」では、H&G (2016) が人新世という概念について概説し、ツーリズムと人新世との出会いに関する簡単な手引きとして、3つの暫定的なテーマを提示する⁴。第2章から第11章までは3つのパートに分かれており、パートⅠ「人新世におけるツーリズムとツーリスト」では、気候変動、生物多様性、化石燃料、移動などの観点から人新世について論じる。パートⅡ「人新世におけるツーリズムの維持」では、グローバルな持続可能性や環境倫理の問題を扱う。パートⅢ「人新世におけるツーリズムの生成」では、ツーリズムとツーリストが地球の感情 (sensibilities) を錬磨し、地球に適応す

⁴ この章の著者は、Gren and Huijbens (G&H) ではなく、Huijbens and Gren (H&G) である。

る方法に焦点を当てる。

ここでは、G&Hが執筆している第1章と第11章を取り上げ、解説する。

4.1. 第1章「ツーリズムと人新世—差し迫った出会いに向き合う」

H&G (2016) は最初に、「人新世へようこそ」の節を設けて、人新世における地球と人類との関係を論じている。まず、「人新世は、完新世に続く新たな地質年代として提唱された名称であるが、人類（アントロポス）（humanity [the Anthropos]）は地質学的な力として認識されており、地球の諸勢力と深くかかわり合っている」と書き出す。地質用語としての人新世には、惑星規模でのジオフォースという文脈における環境変化、持続可能な開発、人間と非人間（non-humans）との間の多様な関係性と関連する多くの論点が設定されていると指摘する。社会科学および人文科学において人新世は、「集団としての人間と地球との関わりが持つ含意という観点から検討されている」と述べ、3つの議論の流れを紹介している。第一に、人新世はどのように環境政治の牽引力となりえるのか、第二に、人新世は人類（アントロポス）という肥大化した観念をいかに示すのか、第三に、人新世は人類の終焉をどのように描き出すのかに関するものである。このような課題に、H&G (2016) は「地球」を付け加える。自然科学において人新世の地球は、「地球システム」と言及されることが多いが、比較的安定し、人類にとって好都合な基盤を提供した完新世の地球とは異なるように見えるシステムである。それどころか、人新世の地球は、地球温暖化などの例が示すように、不安定で不確実性と予測不可能性で満たされている。さらに、この地球システムとの関係において人新世は、特に惑星規模において多くの問題を発生させている。そして、人新世のみならずアントロポスも地球システムも大きな概念であるが、克服されるべきは、これらの概念のさらなる輪郭を描き、再概念化することである。だが、ツーリズムに関して、このプロセスは始まったばかりであると述べ、「人新世における私たちの場所に関すること」、「地球の場所に関すること」、「どのように私たちは両方を取り扱えばいいのか」という暫定的なテーマを掲げている（H&G, 2016, pp. 2-3）。

次節「ツーリズムとアントロポス」は、アントロポスにとって、人新世とは一もちろん、ツーリズムとツーリストが、特に旅行者がジオフォースとして考慮されるとき—惑星と関わり合うことになることを意味する、との指摘から始まる。人新世という未来の到来により、惑星規模での重大な環境変化がもたらされるというシナリオによると、世界の平均気温上昇、生物化学的循環の改変、異常気象はいずれもますます予測が困難になっており、予知できない社会的、経済的な帰結を伴う。こうしたことに関して、「もし人新世が気候変動に関連したその他の出来事と異なるならば、またもし問題や解決策が集団的なジオフォースとしての人類にあるならば、何が可能で何をすべきなのか」と問いかける。それに対して、持続可能な開発と地球の限界という規範的な文脈の下での「地球システムガバナンス（Earth system governance）」は、

「人間による惑星システムへの影響を〔緩和する〕（中略）国際協力のための効果的なネットワーク」（Biermann, 2014a; Biermann, 2014b, pp. 58-59）を必然的に伴うであろうと推論している。人新世におけるツーリズム研究に関して地球システムガバナンスは、ツーリズムの移動性（モビリティ）と提携するかもしれないと主張する。すなわち、ツーリズム開発や移動するツーリストの行動は、燃料消費による排出物質を伴うことから、一つの地球ツーリズムシステムに連結するような道筋も目立つようになってきているのである。しかしながら、「目的地レベルでの大きな燃料消費量やどこか別の場所での低炭素社会や環境責任（green responsibilities）といった政策議題を提起しても、人新世における地球の持続可能性問題にツーリズムを十分に連動させることはできない」と断言する。つまり、「ツーリズムは、アントロポスを人新世の地球環境の諸条件へと連れ出す原動力として概念化される必要があるということだけである」として、動きの中にあるアントロポスあるいは人類は、「旅行によって地球を改変するような増大するジオ・エージェンシーを伴う種全体という文脈において理解される必要がある」とまとめている（H&G, 2016, pp. 3-5）。

「ツーリズムと地球システム」の節では、どのような科学が、人新世のツーリズム政策・計画を特徴づけ指導すべきなのかという問いを提起し、特に「気候戦争（climate war）」を取り上げている。これは、気候科学、特に地球規模での気候変動における人間の役割を重視しないか否定する人と、それを理解しようとし、気候科学に基づいて緩和策を推進したり、行動のための手段を理解するための方法を開発しようとする人との間での戦争を言う。進行中の科学論争に関する2つの陣営として妥当だと思われるのが、この戦争が遂行される方法が、何か異なっているものを示しているということである。つまり、人新世のこの地球とは、「科学を通じて政治論争を終わらせることのできるさまざまな客観的な事実として現われるような、かつての『自然（Nature）』のようなものではない。その代わりに、それは、生成中の地球システムへと改変された地球」と述べる（H&G, 2016, pp. 5-6）。

さらに、H&G（2016）は、アントロポスは、惑星レベルでの地球システム変化を構成する重要なジオフォースではあるが、人間（humans）の関わり方は高度に差異化され一様ではないと指摘する。そして、ツーリズムとの関連においては、「アントロポスというジオフォースは、例えば、時々、悠長に飛行機で旅行する手段を有している、そのようなツーリストとして明確に記述されるだろう」と述べている。そこから、「資本世（Capitalocene）」として人新世が理解されるとし、具体的に、「化石燃料消費の誘因が存在し、また、サヘルやサウスの人びとと比べると、裕福なノースの人びとが出す二酸化炭素排出量が急増しているのは、グローバル化された資本の中心地においてである」と説明する。ではどのようにこれに対処すべきか。H&G（2016）は、「どのように化石燃料排出物を減らせばいいのか、そして将来、どのように

社会のエネルギー不足を埋めればいいのかについて、緊急に討論する必要がある」と指摘し、ツーリズム研究においては、「適応、緩和、脆弱性、レジリエンスおよび従うべきさまざまな変化の軌跡という諸問題である。このような分野の討論では、特に、政策ラーニング、フレキシビリティ、気候変動ガバナンス、市場の役割、消費者行動、機会コスト、ディベロップメントの観点から焦点を合わせるべきである」という指摘に同意を示している（H&G, 2016, pp. 7-8）。

「ツーリズムと人新世を感知できるもの（*sensi/able*）にすること」の節では、「人新世の下で私たちが見つけるものの多くがつかまえてどころのない、姿を現さない、あるいは知覚できないといった特徴」について論じている。知覚できないとはどういうことか。「ツーリストと非ツーリストとも同様に、天気に関する経験から、例えば、大気中の二酸化炭素量について知っているが、直接的に知覚することはない」という事例を挙げている。私たちは、人新世を理解し舵をとるために、さまざまな媒介知識、特に科学からの知識に決定的に依拠しているが、人類をジオフォースとして概念化することと同様に、人類を地球に関する含意および結果に関する推論の対象へと転じることは難しい。なぜならば、私たち自身が、「地球物理学上の勢力とし経験することが不可能」だからである。私たちのジオフォースの力強さは、知覚と概念形成の両方を通じて地球と絡み合っているが、「私たちは地球が何をすることができるのかについてまだ知らない」。にもかかわらず、「私たちの焦点範囲を拡張することによって、私たちは、より敏感に自らの地上でもつれに合わせられるようになるだろう」と推察し、結果として、人新世的な倫理的問いは、どのように「地球の未来へより深遠な献身を懇願できるだろうか」と疑問を呈している。人類と時間、場所、地球の変化を形づくる事物のエージェンシーとの関係は、私たちに驚かせ、刺激し、思考と感覚の新たな方法へと導き、それはまた、「人新世においてそのような懇願が生じるためには、強力で鮮明な政治的想像力が必要とされる」とまとめている（H&G, 2016, pp. 8-9）。

次節の「本書の構成」では、はじめに、「人新世に関する3つのテーマはすべて、個人的、社会的なエートス、知識生産の新たな様式と結びついた環境倫理である」と指摘する。そして、人新世という用語の下でつくられる知識について、「私たちの集団的勢力は地球の勢力とからみ合っており、「地球システムの構成要素としての機能を果たすための準備は即座に整っている」とする。そして、「互酬性（*reciprocity*）に基づくある特定の感性を発展させることは、人新世におけるキーワードとなっている」と述べ、本書の構成と内容について概略している（H&G, 2016, pp. 9-11）。

4.2. 第11章「人新世とツーリズム・デスティネーション」

第11章「人新世とツーリズム・デスティネーション（*The Anthropocene and tourism destination*）」の冒頭には、「この本は、ツーリズム研究でどのように概念的および経験的企て

を再構成することができるかを含めて、人新世がツーリズムにもたらすかもしれない問題と課題を探究した」と記されている。まず、「出発」と題した最初の節では、3つの各パートの論文の結論とG&Hのコメントが述べられている（G&H, 2016, pp. 189-190）。

次の節については、「出発と到着の間」と題しているが、G&Hは何を「出発」とし、何を「到着」として意味付けたのだろうか。地質年代と人類史の時間の尺度が一体化するにつれて、「人新世の到来とともに、私たちは今や、過去1万年間に発達したあらゆる観念を疑わなくてはならない」と述べ、人新世が必要とするのは、「21世紀の生活活動の事実上のあらゆる側面に関して包括的に検討すること、つまり、商品生産から交通システム、エネルギーシステム、食物消費習慣まで、またそれを超えて検討すること」（強調は原文通り）（Castree, 2014, p. 450）であるとする。そして、それを出発として、「人間中心主義（anthropocentrism）を排除するような人新世に関する理解や観念があるが一ともかく、還元主義者、反ヒューマニスト、あるいは決定論者になることなく（Latour, 2014, p. 5）、『地球を中心とした（geo-centric）』人新世にたどり着くことだ」としている。特に重要なことは、「人新世の地球は、ツーリズムのための地上表面として背後に潜んでいるような、すでに構成されている固定された実体（entity）ではなく、むしろ、この『地球』は、ダイナミックな（dynamic）地球システム」である。そして、アントロポスは、地球システムの一部として、また、その機能の一部分となっていると述べる。その上で、「ツーリズム理論の観点から言い換えると、ツーリズムは一般的に、時空の移動性（モビリティ）として概念化されているが、これは地球をツーリズムが生じる単なる地表として捉えるという、一面的でますます時代遅れな理解に相当する。人新世の地球を出発したら、ツーリズムはむしろ、ジオフォースとしてのみならず、地球システムそれ自体の機能を構成する要素の一つとして概念化される必要があるだろう」と強調する（G&H, 2016, pp. 192-193）。

さらに、「デスティネーションとしての人新世とツーリズムの運命」の節において、G&H（2016）は、「デスティネーションとしての人新世に到着することは、地球規模の政治的、経済的、環境的、社会的な秩序における深遠な変化に直面するという見通しを必然的に伴うが、それとともに、ツーリズムという領域においても、諸個人にとって広範な結果を及ぼす可能性がある」ということを前提として、ツーリズムに関連させて論を進めている。まず、可能ならばとしながらも、「気候の趨勢を抑制するために、より積極的にかつ強行に緩和策を維持することが、ツーリズムにおいても必要とされるであろう」（IPCC, 2014）と指摘する。だが、緩和策は地上におけるツーリズム開発のイデオロギーと実践に軽蔑の目を向けながらもしっかりと位置づけられているので、ツーリズムの利害関係者は、革新的な変化の前提条件である新たな外部知識を吸収することにしばしば抵抗するであろうと述べる。その上で、「ローカルなツーリズムビジネスの誰が、プラネタリー・リミットやバウンダリー（惑星の境界や限界）をアク

ションのための定点と捉えるような企業家活動から利益を得るのだろうか」と疑問を呈している。さらに、「デスティネーションのアントレプレナーは、アントロポスのジオフォースを緩和することに寄与するようなイノベーションを、どのように共同でうまく展開しているのかについて想像することは難しい」と悲観的な見方を示している。しかしながら、デスティネーションとしての人新世は、ジオ倫理的な決定によって持続されなければならないであろう、多くの潜在的なツーリズムの運命に伴って生じるが、G&H (2016) は、ホスピタリティ倫理 (hospitality ethics) の必要性を強調する。一つの「地球世界」におけるツーリズム活動に関するジオ倫理的決定として、その核心にある地球資源、その起源と利用、その選出は、ツーリズムにおける価値創造へと組み込まれるだろうとし、それが人新世時代におけるツーリズムの運命であるとする。そして、「人新世における暫定的なツーリズムの運命」を3つ提示している (G&H, 2016, p. 194)。

4.2.1. 非炭素ツーリズム

私たちの地球とのもつれに応答するホスピタリティ・ジオ倫理に関する潜在的な発展の軌跡として、第一に、「非炭素ツーリズム (non-carbon tourism)」がある。G&H (2016) は、「化石燃料の燃焼は、気候変動の核心であり、また、ジオフォースを通じて、地球システムとの私たち全体としてのかかわりあいを表面化させる。気候変動の速度に歯止めをかけるために、化石燃料の燃焼は大きく削減される必要がある」と述べる。そして、「理論的には、少なくとも、カーボンニュートラルの (carbon-neutral) 実践によって舗装される」であろうが、これまでのように、国際ツーリズムのさらなる拡大が進展していることを指摘し、問題とすべき点は、国際ツーリズムの成長は、特に航空について、「非炭素燃料によって本当に持続可能なのか」にあるとする。そして、ジオ倫理的な観点からツーリズムを案じるということは、「地球システムの諸プロセスを『安全に活動できる範囲』を超えて作動させることに関与する既存のツーリズム・ジオパワーを持続させるような、地球規模の不平等にどのように取り組むのかという意味において、地政学的な (geo-political) ことでもあるのだ」と述べている (G&H, 2016, pp. 194-195)。

4.2.2. ステイホームツーリズム

G&H (2016) は、「人新世におけるツーリズムに関する真にジオ倫理的な、また、地政学的な運命は、遠く離れることなく自宅に向かっている」と述べ、第二の運命、「地元であることや、すぐ近くであることの真価に対するより高い評価」を根拠とする、「ステイホームツーリズム (stay-home tourism)」へと私たちを導く。この軌跡は、「今日の炭素集約的な (carbon-intensive) 旅行実践に取り組む方法」として発展することにより、「目的地と関心のある場所が旅行者にとってより身近なものとなり得る」とされる。自宅の真価を認めることによって、「地球時間性 (geo-temporalities)」や将来世代への「地球責任 (geo-responsibilities)」に対する

私たちの注意が喚起される。また、「自宅により近い地球に棲まうもの (earthlings), 例えば, 動物, 野菜や鉱物を考慮すること」によって, 「期待を誘い, 人間の登録簿よりも多くの考えられうる存在の増殖を斟酌」し, 「個人としての生命のライフコースから, 種としてのそれへの認識の移行を引き起こす可能性」が示唆されている (G&H, 2016, pp. 195-196)。

4.2.3. 目的地管理

第三の運命として, 地球管理に関する基本原則を踏まえた上で, G&H (2016) は, 「私たちの責務 (stewardship) は, 地球全体, つまり, 地球という天体に向かうことはできないが, そのために, 部分的にのみ可能である」と主張する。人間とのからみ合い以上の物語, 例えば, 無機物 (inorganic matter) との出会いを提供する物語は, 私たちに, 「ある地球システムの状態あるいは管理体制が別のそれへと変化するときの空間的, 時間的な連結」(Clark, 2014, p. 31) について知らせてくれる。また, 「ツーリズムが持つ変化させる能力を裏付ける人新世の地政学に生命を吹き込む」ことになるとする。それゆえ, 地球管理は, ジオ倫理に基づいたジオホスピタリティの一つであり, そこでは, 「ツーリズムについても, 私たちを地質学上の主体として形づくりながら, 人新世の痕跡として化石燃料が証言する方法に対して, もしくは, 私たち自身の旅行を映し出す汚染された鏡に対して, 私たちは注意深くなることができる」とする (G&H, 2016, pp. 196-197)。

5. まとめ

本稿では, G&Hが人新世の視点からツーリズムを研究の対象とした経緯に着目して, ツーリズムと人新世に関する論点を考察してきた。2012年の論文では, ツーリズムの定義について, 地理学では, 地上に関する学術分野でありながら「地球」に触れられておらず, 社会学では, 自然を省いた非自然的な社会現象として扱われているが, 「社会」そのものの概念が曖昧であることを指摘した。そして, ツーリズムの定義には「地球」を取り込むべきとしたが, その理論に到達することはできなかった。2014年の論文では, 「人新世」の概念を導入して, 理論の進展を図ろうとした。そこでは, 人新世の展開と人間活動との関係を解明して, ツーリズムは明らかに惑星規模のジオフォースの一部であるとの見解を示した。そして, 人新世における人類と地球の地球物理学的な力という観点から既存の問題に取り組むことにより, ツーリズムの持続可能性に関する議論を深める必要性を主張した。2016年の書籍では, ツーリズムと人新世の議論をさらに展開し, 最終的に3つの将来のツーリズムに関する方向性と展望 (非炭素ツーリズム, ステイホームツーリズム, 目的地管理) を挙げている。G&Hが提示した論点は, 気候温暖化などの地球環境の問題に対してツーリズムはどうあるべきかについて示唆している。

謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業JP20K12419（基盤研究C「人新世におけるツーリズムとその課題—脱炭素社会に向けたツーリズムのあり方—」）の助成を受けて行った研究成果の一部である。

参考文献・資料

- Biermann, F. (2014a). *Earth system governance: World politics in the Anthropocene*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Biermann, F. (2014b). The Anthropocene: A governance perspective, *The Anthropocene Review*, 1(1), 57-61. DOI: 10.1177/2053019613516289
- Castree, N. (2014). Geography and the Anthropocene II: Current contributions, *Geography Compass*, 8(7), 450-63.
- Chakrabarty, D. (2012). Postcolonial studies and the challenge of climate change, *New Literary History*, 43(1), 1-18.
- Clark, N. (2014). Geo-politics and the disaster of the Anthropocene, *The Sociological Review*, 62: S1, 19-37. DOI: 10.1111/1467-954X.12122
- Crutzen, P. J. & Stoermer, E. F. (2000). The “Anthropocene”, *Global Change Newsletter*, 41, May 2000, 17-18.
- Crutzen, P. J. (2002). Geology of Mankind, *Nature*, 415, 3 January 2002, 23. DOI: 10.1038/415023a
- Franklin, A. (2003). *Tourism: An introduction*, London: SAGE Publications Ltd.
- Franklin, A. & Crang, M. (2001). The trouble with tourism and travel theory?, *Tourist Studies*, 1(1), 5-22. DOI: 10.1177/146879760100100101
- Gren, M. & Huijbens, E. H. (2009). *Images, the social and earthly matters in tourism studies*, Akureyri: Icelandic Tourism Research Centre.
- Gren, M. & Huijbens, E. H. (2012). Tourism theory and the Earth, *Annals of Tourism Research*, 39(1), 155-170. DOI: 10.1016/j.annals.2011.05.009
- Gren, M. & Huijbens, E. H. (2014). Tourism and the Anthropocene, *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, 14(1), Routledge, 1-17. DOI: 10.1080/15022250.2014.886100
- Gren, M. & Huijbens, E. H. (Eds.) (2016). *Tourism and the Anthropocene*, London and New York: Routledge.
- Gren, M. & Huijbens, E. H. (2016). The Anthropocene and tourism destinations, In Gren, M. & Huijbens, E. H. (Eds.), *Tourism and the Anthropocene*, 189-199, London and New York: Routledge.
- Huijbens, E. H. & Gren, M. (2016). Tourism and the Anthropocene: An urgent emerging encounter, In Gren, M. & Huijbens, E. H. (Eds.), *Tourism and the Anthropocene*, 1-13, London and New York: Routledge.
- IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) (2014). *Climate change 2014. Impacts, adaptation, and vulnerability*, New York: Cambridge University Press.
- Latour, B. (1993). *We have never been modern*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Latour, B. (2004). *Politics of nature: How to bring the sciences into democracy*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Latour, B. (2005). *Reassembling the social: An introduction to actor-network-theory*, Oxford: Oxford University Press (伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局, 2019年).
- Latour, B. (2007). A plea for earthly sciences. Retrieved from http://www.bruno-latour.fr/sites/default/files/102-BSA-GB_0.pdf
- Latour, B. (2014). On selves, forms, and forces, *Journal of Ethnographic Theory*, 4(2), 1-6. DOI: <https://doi.org/10.14318/hau4.2.014>
- Lew, A. A. (2001). Literature review: Defining a geography of tourism, *Tourism Geographies*, 3(1), 105-114.

- Morton, T. (2012). The Oedipal logic of ecological awareness, *Environmental Humanities*, 1(1), 7-21. DOI:10.1215/22011919-3609949
- Page, S. J., & Connell, J. (2006). *Tourism: A modern synthesis*, London: Thomson.
- Pálsson, G. *et al.* (2012). Reconceptualizing the ‘Anthropos’ in the Anthropocene: Integrating the social sciences and humanities in global environmental change research, *Environmental Science and Policy*, 28, 3-13. DOI: 10.1016/j.envsci.2012.11.004
- Preston, C. J. (2012). Beyond the end of nature: SRM and two tales of artifice for the Anthropocene, *Ethics, Policy and Environment*, 15(2), 188-201. DOI: 10.1080/21550085.2012.685571
- Shaw, G., & Williams, A. (2004). *Tourism and tourism spaces*, London: SAGE Publications Ltd.
- Sörlin, S. (2013). Reconfiguring environmental expertise, *Environmental Science and Policy*, 28, 14-24. DOI: 10.1016/j.envsci.2012.11.006
- Steffen, W., Crutzen, P. J., & McNeill, J. R. (2007). The Anthropocene: Are humans now overwhelming the great forces of nature?, *Ambio*, 36(8), 614-621. DOI: 10.1579/0044-7447(2007)36[614:TAAHNO]2.0.CO;2
- Urry, J. (2002). *The tourist gaze*, London: SAGE Publications.
- Van der Duim, R. (2007). Tourismscapes: An actor-network perspective, *Annals of Tourism Research*, 34(4), 961-976. DOI:10.1016/J.ANNALS.2007.05.008
- 片瀬葉香 (2020) 「人新世におけるツーリズムの課題に関する一考察」『第35回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, 257-260.

